

《ラ・チェネレントラ》 作品解説 水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシニア協会紀要）第24号（2003年発行）の拙稿『ロッシニア全作品事典（18）《ラ・チェネレントラ、または善意の勝利》』ですが、題名の日本語訳も含めた改訂版をHPに掲載します。

（2011年4月改訂／2014年3月及び12月再改訂）

I-20 ラ・チェネレントラ、または勝利した善良さ *La Cenerentola, ossia La bontà in trionfo*

劇区分 2幕のドランマ・ジョコーゾ (dramma giocoso in due atti)

第1幕：全15景、第2幕：全10景、イタリア語

台本 ヤーコポ・フェッレッティ (Jacopo Ferretti, 1784-1852)

原作 フランチェスコ・フィオリニ (Francesco Fiorini) のオペラ台本『アガティーナ、または報いられた美德 (*Agatina o la virtù premiata*)』(ステーファノ・パヴェージ作曲。1814年4月10日ミラーノのスカラ座初演)¹

作曲年 1816年12月25日～1817年1月24日

初演 1817年1月25日(土曜日)、ローマ、ヴァッレ劇場 (Teatro Valle) 註：初版台本は Teatro Valle degl'Illustrissimi Sig [sic] Capranica (令名高きカブラーニカ氏 [夫妻] のヴァッレ劇場) と記載。

人物 ①ドン・ラミーロ Don Ramiro (テノール、c#'-c") ……サレルノの王子

②ダンディーニ Dandini (バス、G-f') ……ラミーロの従者

③ドン・マニーフィコ Don Magnifico (バス、A-f#') ……零落貴族のモンテ・フィアスコネ男爵

④クロリンダ Clorinda (ソプラノ、a-b") ……ドン・マニーフィコの娘

⑤ティズベ Tisbe (メッツソプラノまたはソプラノ、a-a") ……ドン・マニーフィコの娘

⑥アンジェリーナ Angelina (コントラルトまたはメッツソプラノ [註]、f-b") ……ドン・マニーフィコの後妻の連れ子。チェネレントラ (Cenerentola、灰かぶり娘) と呼ばれ、こきつかわれている。

註：批判校訂版に基づくリコルディ版ピアノ伴奏譜 (2004年) が「ソプラノ」とするのは明らかに誤り。

⑦アリドーロ Alidoro (バス [註]、A-b-e') ……哲学者、ドン・ラミーロの教育係

註：批判校訂版に基づくピアノ伴奏譜 (同前) が「テノール」とするのは明らかに誤り。

他に、貴婦人たち (黙役)、王子の家臣たち (男声合唱：テノール I・II、バス [N.8 のみ 2部に分かれる])

初演者 ①ジャコモ・グリエルミ (Giacomo Guglielmi, ?-?)

②ジュゼッペ・デ・ベニス (Giuseppe de Begnis, 1793-1849)

③アンドレーア・ヴェルニ (Andrea Verni, ?-1822)

④カテリーナ・ロッシ (Caterina Rossi, ?-?)

⑤テレザ・マリアーニ (Teresa Mariani, ?-?)

⑥ジェルトルーデ・リゲッティ=ジョルジ (Geltrude Righetti-Giorgi, 1793-1862) 註：初版台本にはジェルトルーデ・ジョルジ (Geltrude Giorgi) と記載。

⑦ゼノービオ・ヴィタレリ (Zenobio Vitarelli, ?-?)

管弦楽 2フルート/ピッコロ、2オーボエ、2クラリネット、2ファゴット、2ホルン、2トランペット、1トロンボーン、弦楽合奏、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器

演奏時間 序曲：約8分、第1幕：約90分、第2幕：約65分

註：差し替えアリアの選択やN.8、N.15のカットの有無で異なる。

自筆楽譜 アッカデーミア・フィラルモニーカ図書館 (Biblioteca dell'Accademia Filarmonica)、ボローニャ (全曲) ロッシニア財団、ペーザロ (N.6a)

初版楽譜 Breitkopf und Härtel, Leipzig, 1822. (ピアノ伴奏譜初版。レチタティーヴォとN.8を除く)

註：全集版は次のCarli版を初版としたが、その後ロッシニア財団はBreitkopf und Härtel版の刊年を1823年から1822年に変更し、Carli版に先立つと推測。

Carli, Paris, 1822-23. (ピアノ伴奏譜)

註：1822年のパリ初演ヴァージョン。同時期にPacini, Paris, 1822-23.も出版。

Fondazione Rossini, Pesaro, 1998. (下記全集版。総譜初版)

註：19世紀末にリコルディ社が貸し譜用に総譜を制作し、これを使ったドイツ語版 (《アンジェリーナ Angelina》)

1929年ベルリン)も出版されたが、ロッシーニの原譜に忠実でないため下記全集版が総譜初版となる。

全集版 I/20 (Alberto Zedda 校訂, Fondazione Rossini, Pesaro, 1998.)

楽曲構成 (全集版に基づく。一部追加)

序曲 [Sinfonia]: 変ホ長調、4/4拍子、マエストーゾ〜2/4拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ

【第1幕】

- N.1 導入曲 (いえ、いえ、いえ、いえ、いるものですか *No no no no: non v'è*) (クロリンダ、ティズベ、チェネレントラ、アリドーロ、男声合唱)
— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈あの方たちに半スクードあげなさい *Date lor mezzo scudo*〉(クロリンダ、ティズベ、チェネレントラ、アリドーロ)
- N.2 マニーフィコのカヴァティーナ〈わが子孫たる娘たち *Miei rampolli femminini*〉(マニーフィコ)
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈いいですか、もうすぐ…*Sappiate che fra poco...*〉(クロリンダ、ティズベ、マニーフィコ)
- N.3 チェネレントラとラミーロの二重唱〈まったくひと気がない *Tutto è deserto.*〉〜〈何か判らぬ甘美なものが *Un soave non so che*〉(クロリンダ、ティズベ、チェネレントラ、ラミーロ)
— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈何と言ってよいやら *Non so che dir*〉(ラミーロ、マニーフィコ)
- N.4 [合唱]〈花嫁をお選びください、急いで *Scegli la sposa, affrettati*〉と、ダンディーニのカヴァティーナ〈4月の日々の蜜蜂のように *Come un'ape ne' giorni d'aprile*〉(クロリンダ、ティズベ、ラミーロ、ダンディーニ、マニーフィコ、男声合唱)
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈なんて嬉しや! なんと美しき絵画たち! *Allegrissimamente! che bei quadri!*〉(クロリンダ、ティズベ、チェネレントラ、ラミーロ、ダンディーニ、マニーフィコ)
- N.5 五重唱〈ご主人様、ひと言だけ *Signor, una parola*〉(チェネレントラ、ラミーロ、ダンディーニ、マニーフィコ、アリドーロ)
— 五重唱の後のレチタティーヴォ〈親切で、愛嬌のある、美しき人には *Grazie, vezzi, beltà*〉(チェネレントラ、アリドーロ)
- N.6 アリドーロのアリア〈世界は広大な劇場 *Vasto teatro è il mondo*〉(アリドーロ)
— アリアの後のレチタティーヴォ〈なんと素晴らしい、素晴らしい、素晴らしい! *Ma brevo, bravo, bravo!*〉(クロリンダ、ティズベ、ラミーロ、ダンディーニ、マニーフィコ)
- N.7 第1幕フィナーレ〈かくもたくさん *Conciosiacosaché*〉(クロリンダ、ティズベ、チェネレントラ、ラミーロ、ダンディーニ、マニーフィコ、アリドーロ、男声合唱)

【第2幕】

- N.8 導入曲 騎士たちの合唱〈ああ! 見知らぬ美女の *Ah! Della bella incognita*〉(男声合唱)
— 合唱の後のレチタティーヴォ〈あの悪党どもは *Mi par che quei birbanti*〉(クロリンダ、ティズベ、マニーフィコ)
- N.9 マニーフィコのアリア〈娘たちのどちらでも *Sia qualunque delle figlie*〉(マニーフィコ)
— アリアの後のレチタティーヴォ〈ねえ、まだ夢見てるの *Dì: sogni ancor che il Principe*〉(クロリンダ、ティズベ、チェネレントラ、ラミーロ、ダンディーニ、アリドーロ)
- N.10 レチタティーヴォ〈そのときに…もしもお嫌いでなければ…*E allor...se non ti spiaccio...*〉とラミーロのアリア〈そう、誓って彼女を見つけ出す *Sì, ritrovarla io giuro*〉(ラミーロ、アリドーロ、男声合唱)
— アリアの後のレチタティーヴォ〈もうすぐ夜になる *La notte è omai vicina*〉(ダンディーニ、マニーフィコ、アリドーロ)
- N.11 ダンディーニとマニーフィコの二重唱〈重要な秘密を *Un segreto d'importanza*〉(ダンディーニ、マニーフィコ)
— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈運命が私を導く *Mi seconda il destino*〉(アリドーロ)
- N.12 チェネレントラのカンツォーネ〈昔、ひとりの王様がいました *Una volta c'era un Re*〉(チェネレントラ)
— カンツォーネの後のレチタティーヴォ〈なんて愛しいお方! *Quanto sei caro!*〉(クロリンダ、ティズベ、チェネレントラ、マニーフィコ)
- N.13 嵐 [Temporale]
— 嵐の後のレチタティーヴォ〈みなさん、失礼します *Scusate Amici*〉(クロリンダ、チェネレントラ、ラミーロ、ダンディーニ、マニーフィコ)
- N.14 六重唱〈あなたなのですね *Siete voi?*〉(クロリンダ、ティズベ、チェネレントラ、ラミーロ、ダンディーニ、マニーフィコ)

— 六重唱の後のレチタティーヴォ〈つまり、私たち馬鹿にされたってわけ？ Dunque noi siam burlate?〉(クロリンダ、ティズベ、アリドーロ)

N.15 クロリンダのアリア〈みじめだわ！ 私は信じていたのに Sventurata! mi credea〉(クロリンダ)

— アリアの後のレチタティーヴォ〈丸薬は少しばかり硬いが La Pillola è un po' dura〉(ティズベ、アリドーロ)

N.16 第2幕フィナーレ：合唱〈幸運がいつまでも Della fortuna istabile〉とチェネレントラのシェーナ〈花嫁よ…王子様 Sposa...Signor〉[とロンド]〈苦しみと涙のうちに生まれ Nacqui all'affanno,e al pianto〉(クロリンダ、ティズベ、チェネレントラ、ラミーロ、ダンディーニ、マニーフィコ、アリドーロ、男声合唱)

物語 (時と場所の指定なし)

【第1幕】

ドン・マニーフィコ男爵の城の1階にある古びた広間。マニーフィコの娘クロリンダとティズベの姉妹はお洒落に余念がない。一方、腹違いの継子でチェネレントラと呼ばれるアンジェリーナは、悲しげに「昔、ひとりの王様がおりました」を歌いながら掃除をしている。そこにノックの音が聞こえ、見知らぬ老人が物乞いに来る(彼はサレルノの王子ドン・ラミーロの教育係で、王子の花嫁にふさわしい娘を見つけるため乞食に変装している)。心の優しいチェネレントラはパンとコーヒーを与えるが、それを見て姉妹は怒る。そこへ王子の従者たちが現れ、花嫁選びのために一家を王宮へ招待する。すっかり喜んだ姉妹はあれこれ指図してチェネレントラをふりまわし、大騒ぎになる(N.1 導入曲)。

邸内の騒ぎで眼を覚まし不機嫌なドン・マニーフィコが現れ、翼のはえたロバが空を飛ぶ夢を見たと言ふ。そしてロバは自分で、娘が王妃になって孫が生まれる前兆に違いないと解釈して喜ぶ(N.2 マニーフィコのカヴァティーナ)。

誰もいなくなった部屋に、サレルノの王子ドン・ラミーロが従者の姿で現れる。そこへ来たチェネレントラは見知らぬ人に驚き、持っていたカップを落として割ってしまう。問いに答えて身の上を語る彼女にラミーロは魅せられ、二人は互いに好意を抱く(N.3 チェネレントラとラミーロの二重唱)。続いて王子に扮したダンディーニが家臣を連れて現れる。花嫁選びを促す歌声に導かれた彼は、お世辞を言って姉妹の気を引き、これにラミーロとマニーフィコも加わる(N.4 合唱とダンディーニのカヴァティーナ)。贗王子ダンディーニは姉妹を王宮の舞踏会へ招待、いざ出発の段になると、チェネレントラはマニーフィコへ「1時間だけでも私を連れて行ってください」と懇願する。彼女を追い払おうとするマニーフィコ。彼は制止しようとするラミーロとダンディーニに対し「これは娘ではなく召使です」と説明するが、戸籍簿を持って現れたアリドーロが「当家には娘が三人いる」というので大騒ぎになる(N.5 五重唱)。全員退場すると乞食の姿のアリドーロが現れ、悲しむチェネレントラに「この世は大きな劇場。誰もが喜劇役者にすぎぬ」と言って慰める(N.6 アリドーロのアリア)。やがて一台の馬車が来て、チェネレントラを乗せて走り去る。

舞台はラミーロの宮殿の広間に変わる。マニーフィコは贗王子ダンディーニから宮殿の酒蔵管理官に任命され、大喜びする。入れ替わりにラミーロとダンディーニ、クロリンダとティズベが現れ、姉妹は贗王子に媚を売る。やがて新たな来客を告げるラッパの音が聞こえ、独りの淑女の到来が告げられる。廷臣たちに導かれて姿を現したのはヴェールをかぶる謎の美女。ヴェールを取ると、それがチェネレントラそっくりなのでマニーフィコと姉妹は頭が混乱し、やがて全員が狂騒状態に陥る(N.7 第1幕フィナーレ)。

【第2幕】

ラミーロの宮殿の一室。騎士たちが、先ほど現れた見知らぬ美女がみなに与えた驚きを歌う(N.8 導入曲[騎士たちの合唱])。マニーフィコと二人の娘は、謎の美女がチェネレントラと瓜二つであることに当惑している。それでもマニーフィコは娘のどちらかが王子の花嫁になると信じ、舅になったあかつきにはどんなに良い思いをするかを想像して浮かれる(N.9 マニーフィコのアリア)。入れ替わりにラミーロが来ると、ダンディーニとチェネレントラが姿を見せるので物陰に身を隠す。贗王子に言い寄られたチェネレントラが拒絶し、「あなたの従者を愛しています」と言うので、ラミーロは嬉しさのあまり彼女の前に飛び出す。しかしチェネレントラは、「私の素性をお調べになってください」と言って腕輪を渡し、立ち去る。ラミーロは「きっと彼女を見つけ出してみせる」と決意を歌う(N.10 レチタティーヴォとラミーロのアリア)。

王子に理想の女性が現れたのを見たダンディーニは、これで自分の役目は終わったと悟る。ところがマニーフィコは彼をまだ王子と信じているので、自分はただの召使なのだと告白する。それを聞いてマニーフィコは動転する(N.11 ダンディーニとマニーフィコの二重唱)。

舞台はマニーフィコの城の広間に変わる。チェネレントラが「昔、ひとりの王様がおりました」を口ずさんで従者のことを思っていると(N.12 チェネレントラのカンツォーネ)、マニーフィコと姉妹たちが帰宅して彼女に怒りをぶつける。やがて嵐が通り過ぎる(N.13 嵐)。そこへ嵐で馬車が転覆したラミーロとダンディーニがやって来る。王子は

チェネレントラに腕輪の片方を認め、二人は互いの正体を知って喜びにひたる。だが、事態を飲み込めぬマニーフィコと姉妹がチェネレントラを叱るので、ラミーロは彼らを一喝し、大混乱に陥る (N.14 六重唱)。

憤懣やるかたない姉妹の前にアリードローが現れてことの次第を説明し、運命を甘受するよう促す。それでもクロリンダは納得せず、侮辱されたと怒る (N.15 クロリンダのアリア)。

玉座のある広間。人々が善良さの勝利を称え、ラミーロから「花嫁」といわれたチェネレントラは放心状態の呈。マニーフィコが彼女の前にひざまずき、許しを請おうとすると、王子は姉妹の高慢さを非難しかけるが、チェネレントラはこれを遮り、「過去は忘れ、皆を許します」と言い、妃となる喜びと家族との和解を歌う (N.16 第2幕フィナーレ)。

解説

【作品の成立】

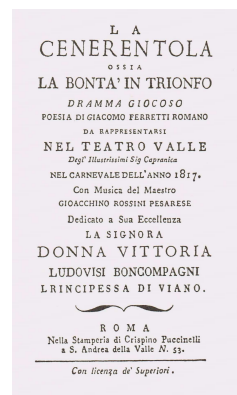
1810年《結婚手形》でオペラ作曲家デビューを飾ったロッシーニは、《ジジスモンド》(1814年)までの13作を北部イタリアの4都市(ミラーノ、ヴェネツィア、ポローニャ、フェッラーラ)で作曲初演した。それゆえ《試金石》《タンクレーディ》《アルジェのイタリア女》の3作が彼の名をイタリア全土に広めたとしても、当時のロッシーニはまだ「地域限定」作曲家にすぎず、中心的な活動都市もミラーノとヴェネツィアの二つに集約できる。その後彼はナポリに転出するが、これには興行師バルバーイアの誘いに応じたというだけでなく、フランスによるイタリア支配の完全な終焉と、ロッシーニ一家の住むポローニャへのオーストリア軍進駐といった社会情勢の変化も関係していた。それゆえ王政復古の確定した1815年春に、南部イタリアの二大都市(ローマとナポリ)の劇場と興行師から新作を依頼されたのは、ロッシーニにとって渡りに舟であった。彼はローマのヴァッレ劇場と新作契約を結び、バルバーイアとはナポリの王立劇場の音楽監督兼作曲家として契約、直ちにナポリに活動拠点を移した。

その結果、前記契約によって《イングランド女王エリザベッタ》(1815年10月4日サン・カルロ劇場初演)と《トルヴァルドとドルリスカ》(同年12月26日ヴァッレ劇場初演)が誕生した。さらに《トルヴァルドとドルリスカ》の初演初日にローマのアルジェンティーナ劇場の支配人と新作契約を交わし、《セビーリャの理髪師》(1816年2月20日初演)が誕生する。ヴァッレ劇場の興行師ピエートロ・カルトーニ(Pietro Cartoni, 1779-1837)が次の謝肉祭期間のための新作を求め、《セビーリャの理髪師》初演でローマに滞在するロッシーニと契約したのは1816年2月29日、彼の24歳の誕生日であった。

この契約書は現存し、オペラのジャンルがブッフアであり、同年12月26日(謝肉祭シーズンの開幕)に初演すること、ロッシーニが歌手と管弦楽の稽古を指導して最初の三晩の指揮を執ることが明記されている。また作曲した楽譜は第1幕を11月末までに、第2幕全部を12月15日までに筆写者へ渡すよう義務づけ、楽譜の所有権はカルトーニに属し、作曲報酬500スクードの支払いは第1幕の楽譜を渡した後と、最初の三晩の指揮をした後の分割払いが約束されている²。この時点で、ロッシーニは10月末のローマ入りを予定していた。

ナポリに戻ったロッシーニは、舞台形式のカンタータ《テーティとペレーオの結婚》(4月24日フォンド劇場初演)と喜歌劇《新聞》(9月26日フィオレンティーニ劇場初演)を同地で発表した。ロッシーニはナポリの王立劇場のための新作《オテッロ》を10月10日までに完成すると約束を果たせず、11月いっぱい忙殺されてしまうのである。その間ロッシーニはカルトーニに宛てて2通の書簡(10月28日付と11月8日付)を送り、その中で「12月3日には絶対ローマに到着する」と言明している³。だが、作曲の遅れで《オテッロ》初演が12月4日にずれ込んでこの約束も果たせず、不思議なことにロッシーニはその後もナポリに留まっていた(12月9日付の母に宛てた手紙に「明後日ローマに行きます」と書かれているが⁴、同月半ばにもまだナポリに居た)。

結局謝肉祭シーズン開幕の2週間前にもロッシーニが現れないことから、ローマの劇場委員会(Deputazione degli Spettacoli)はロッシーニの契約違反を訴える書簡(12月17日付)⁵をナポリの警察長官に送り、これを知ったロッシーニは慌ててローマに旅立った。この時点で同月26日の初演は絶望的で、シーズン開幕の新作発表は見送られた。当初ロッシーニが台本に予定したのは、ガエターノ・ロッシ(Gaetano Rossi, 1774-1855。《結婚手形》《タンクレーディ》の台本作者)が彼のために書き下ろす『宮廷のニネッタ(Ninetta alla Corte)』であった⁶。前記10月28日付のカルトーニ宛書簡でロッシーニは、すでに台本の第1幕が出来上がり、これを同封した旨を記し、「たとえ第2幕が第1幕より良くなかったとしても、問題ありません」と述べている。11月8日付の書簡では、「詩人ロッシから台本をすべて受け取りました。第2幕は最高に美しいとあなたに保証します。変化に富み、劇場向きです」と断言している。



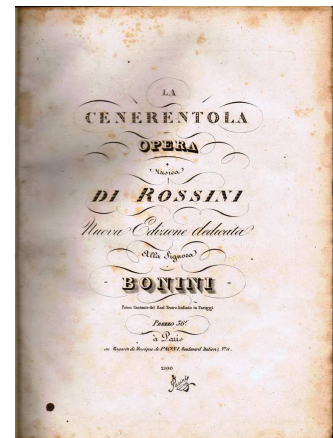
《ラ・チェネレントラ》
初版台本タイトル頁

ところがロッシーニがローマに到着すると、同地の検閲当局がロッシーニの大幅な改訂を前提に上演を許可したことが判った。ロッシーニとカルトーニはローマの諸劇場のために台本を提供していたヤコポ・フェッレットティ (Jacopo Ferretti, 1784-1852) を呼んで問題を協議し、結局フェッレットティが新たな台本を提供することで話がまとまった。この三者協議はクリスマス 2 日前の 12 月 23 日に行われ、題材がサンドリヨン (Cendrillon) に決まったのはその深夜だった。ロッシーニはフェッレットティに「明朝までにあらすじをまとめるよう」命じると、自分はさっさと寝てしまったという。

シンデレラ物語の原作はシャルル・ペロー (Charles Perrault, 1628-1703) の『サンドリヨン、または小さなガラスのスリッパ (Cendrillon ou la petite pantoufle de verre)』(1697 年) に遡り、これに基づくオペラ化も 18 世紀フランスにあるものの (ジャン=ルイ・ラルリュエット [Jean-Louis Laruelle, 1731-1792] 作曲、1759 年)、広く知られるきっかけを作ったのはニコロ・イズアール (Nicolò Isouard, 1775-1818) 作曲のオペラ・コミック《サンドリヨン (Cendrillon)》(1810 年 2 月 22 日パリのオペラ・コミック劇場初演。台本: シャルル=ギヨーム・エティエンヌ Charles-Guillaume Etienne, 1778-1845) だった。イタリア・オペラはイズアール作品を下敷きにしたフランチェスコ・フィオリニ (Francesco Fiorini, ?-?) 台本、ステファノ・パヴェージ (Stefano Pavesi, 1779-1850) 作曲の《アガティーナ、または報いられた美徳 (Agatina o la virtù premiata)》が 1814 年 4 月 10 日にミラーノのスカラ座で初演されている。フェッレットティはその印刷台本を入手しており (おそらくエティエンヌのフランス語台本も手元にあった)、これを下書きに、事実上の剽窃に近い形で改作した。

題名は当初《サンドリーリヤ、または灰寝床 (Sandriglia ossia La Covaccenera)》とされたが (ロッシーニの母宛の書簡、12 月 23 日付) ⁷、《アンジョリーナ、または勝利した善良さ (Angiolina o la bontà in trionfo)》を経て、現在の《ラ・チェネレントラ、または勝利した善良さ (La Cenerentola ossia La bontà in trionfo)》となった。フェッレットティは主人公の名をアガティーナ (Agatina) からアンジョリーナ (Angiolina) に変更したが、当時ローマに同じ名前の女魔法使いがいて人心を惑わしていたことが検閲で問題視され、アンジェリーナ (Angelina) に落ち着いたのだという ⁸。

フェッレットティによればロッシーニは導入曲をクリスマスに書き上げ、翌 26 日にはドン・マニーフィコのカヴァティーナ (N.2)、その翌日には二重唱 1 曲と、猛烈な勢いで作曲を進めた。しかし、レチタティーヴォ・セッコの総てとアリードローのアリア〈世界は広大な劇場 (Vasto teatro è il mondo)〉(N.6)、騎士たちの合唱〈ああ! 見知らぬ美女の (Ah! Della bella incognita)〉(N.8) とクロリンダのアリア〈みじめだわ! 私は信じていたのに (Sventurata! mi credea)〉(N.15) は、あらかじめルーカ・アゴリーニ (Luca Agolini, ?-?) に作曲が委ねられた。年が明けた 1817 年 1 月 11 日には第 1 幕を脱稿し、その段階で初演も同月 20 日に予定されたが ⁹、完成にはなお時間を要した。フェッレットティの言を信じれば台本は 22 日間で仕上げられ、ロッシーニはこれと並行して 24 日間で作曲、最後にとりかかった楽曲 (N.11 ダンディーニとマニーフィコの二重唱) の完成は初演前夜で、その稽古は初日の朝と幕間に行われたという ¹⁰。



最初版のタイトル頁 (パリ、パニーニ社、1822-23 年。ボンイング/サザランド旧蔵書、筆者所蔵)

【特色】

《ラ・チェネレントラ、または勝利した善良さ》はロッシーニ最後のオペラ・ブッフアであり、《セビーリヤの理髪師》と共に喜歌劇のジャンルにおける彼の最高傑作と位置付けられる。どちらもローマの劇場用に短期間に作曲され、ヒロインの創唱歌手がジェルトルーデ・リゲッティ=ジョルジとの共通点がある。彼女が『覚書』(1822 年) でも述べているように、ロッシーニはこの作品を大急ぎで作曲し、その際周囲に「騒いで自分を助けてくれるよう」頼んだ。喧騒の中で靈感が湧くというのはモーツァルトやチャマローザも同様で、一日 1 曲を一気呵成に書き下ろすのは、速筆というよりも天才のなせる業であろう。ロッシーニに湧き出る靈感はこのオペラ全編を貫いているが、喜劇的な中にも感傷性が際立つ点で彼のそれ以前のオペラ・ブッフアとは異なり、このジャンルにおける一つの帰結と見なすことができる。

旧作からの主な改作転用は序曲と第 2 幕フィナーレに含まれるチェネレントラのロンドで、序曲は《新聞》(1816 年ナポリ初演) 序曲の自筆楽譜をナポリから持参、トロンボーン演奏箇所を増やすなど僅かに手を加え、これを筆写させて使用した。フィナーレのロンド部分〈もはや私は炉端で (Non più mesta)〉は、《セビーリヤの理髪師》(1816 年ローマ初演) の伯爵のアリア〈もう逆らうのをやめろ (Cessa di più resistere)〉後半部を改作して転用した。ロッシーニはこれを女声 (ソプラノ) 用に改作して《テーティとペレーオの結婚》(1816 年) に使用し、またリゲッティ=ジョルジがすでに《セビーリヤの理髪師》の再演でコントラルト用に移調した〈もう逆らうのをやめろ〉を歌ってい

ることから採用を決めたようである¹¹。しかし、その前段に当たる〈苦しみと涙のうちに生まれ (*Nacqui all'affanno, e al pianto*) を新たに書き、パッセージの変更も行っている。それゆえ楽曲としては、主題転用を含む新作と位置づけられる。興味深いことに、フェッレティは初版台本の諸言に「私のこの題材を取り上げることを決意させた大きな理由のひとつは、まさに善良さそのものが純粹に現れているあのアリアでした。その善良さはあの優秀なジョルジ夫人について誰もが知るよき性格のひとつであり、またおとぎ話ではその性格ゆえにチェネレントラは報いられたのです」(小畑恒夫訳)¹²と記している。題材の選択にリゲッティ=ジョルジの善良な性格や、彼女の歌った〈もう逆らうのをやめろ〉コントラルト・ヴァージョンに関わっていたとは俄かに信じられないが、事実であれば、ロッシーニがあらかじめフィナーレにこのロンドを提案していたことになろう。しかしながら、純粹な転用に当たるのは序曲のみで、それ以外はアゴリーニに作曲させたナンバーを除いて新曲である。

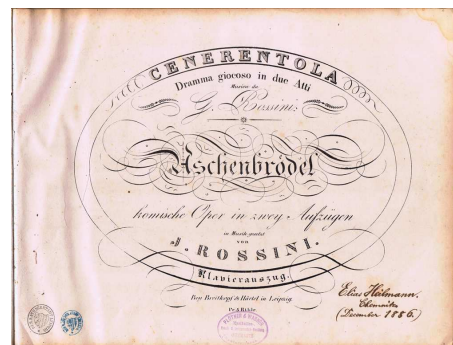
ロッシーニ書き下ろしの楽曲は、芸術的に高い水準を達成している。導入曲でアンジェリーナの歌う民謡風の「昔、一人の王様がおりました (*Una volta c'era un re*)」は彼女の境遇を示すと共に「王は奢侈や華美を嫌い、純真で善良な娘を選ぶ」という劇の主題を提示し、継姉たちに振り回される痛快なストレッタ「チェネレントラ、おいで (*Cenerentola vien qua*)」が最初のクライマックスを形成する。チェネレントラとラミーロの二重唱〈まったくひと気がない (*Tutto è deserto.*)〉(N.3) はレガートとスタッカートを使い分けて優美に歌い出され、愛情あふれる音楽にロッシーニの円熟が聴き取れる。アンサンブルの完成度も抜群で、五重唱〈ご主人様、ひと言だけ (*Signor, una parola*)〉(N.5) ではアンジェリーナの懇願、ダンディーニとラミーロの怒り、戸籍簿を示されても「娘は死んだ」と嘘をつく男爵の厚顔ぶりなど各人の性格をあらためてクローズアップし、興奮した5人が早口でまくし立てるストレッタも痛快である。

長大な第1幕フィナーレは、酒蔵係に任命されたマニーフィコの合唱付きアリア、ダンディーニとラミーロの二重唱(途中からクロリンダとティズベを含めて四重唱となる)、短い合唱、謎の美女の第一声「贈り物は結構です (*Sprezzo quei don che versa*)」、全員が狂騒状態に陥るストレッタ〈夢を見ているよう (*Mi par d'essere sognando*)〉と劇的狀況に合わせて音楽が変化し続け、序曲のクレシェンドと歌を合体させた活気あふれる音楽で閉じられる。第2幕の六重唱〈あなたなのですね (*Siete voi?*)〉(N.14) では各人の驚きが巧みに表現され、ダンディーニがスタッカートで歌い出すアンサンブルでは巻き舌の r を含む「グルッポ (*gruppo*)」「ズグルッパ (*sgruppa*)」の言葉が愉快な効果を醸し出す。その後半部はアンジェリーナの情緒豊かな歌で始まり、早口の爽快なクライマックスを形成する。同音反復や擬音を交えたマニーフィコのカヴァティーナ〈わが子孫たる娘たち (*Miei rampolli femminini*)〉(N.2)、ダンディーニのカヴァティーナ〈4月の日々の蜜蜂のように (*Come un'ape ne' giorni d'aprile*)〉(N.4) における誇張した滑稽表現も秀逸で、両者の二重唱〈重要な秘密を (*Un segreto d'importanza*)〉(N.11) も滑稽デュオの名曲である。

真面目な人物であるアンジェリーナとラミーロの真摯な感情表現も随所に聴かれ、とりわけアンジェリーナの感傷的で情緒豊かな歌の表現は本作に新たな外観を与え、オペラ・ブッフアの枠組みを踏み出している。嵐[Temporale]の音楽(N.13。ニ短調、3/4拍子、アレグロ)は《試金石》や《セビーリヤの理髪師》に前例があるが、ここでは嵐で馬車が転覆したラミーロとダンディーニがやって来る設定に従い、《セビーリヤの理髪師》のそれがローマで知られていることから新たなコンセプトで作曲されている。

指摘しておきたいのは、この作品では登場人物が真摯な性格(アンジェリーナ、ラミーロ、アリドーロ)と喜劇的役割(マニーフィコ、クロリンダ、ティズベ、ダンディーニ)に分けられ、劇中で「心は薄切りメロン、脳みそは空き家」と揶揄される2人の継姉と、娘の結婚を財産獲得の手段と考えるマニーフィコの愚かさがグロテスクに誇張されている点である。人間の営みに注がれる冷徹な視線、打算的結婚に対する辛辣な批判は「現代社会への挑戦としてのロッシーニの喜劇性」(ブルーノ・カーリ)¹³にほかならず、心理のひだを音楽で綿密に表現する手法も時代に先んじている。アンジェリーナも白馬の王子様を夢見る受身の女性ではない。彼女はみずから従者への愛を口にし、腕輪の片方を渡してもう片方の持ち主を捜すよう求めるのだ。そんな強い意志を持つヒロインの存在も、《ラ・チェネレントラ》の魅力の源泉となっている。

前記のように、アゴリーニはレチタティーヴォ・セッコの全部とアリドーロのアリア(N.6)、騎士たちの合唱(N.8)、クロリンダのアリア(N.15)を作曲したが、その後アリドーロのアリアは1818年ローマ再演で作曲者不詳のアリア〈静かに、物音が聞こえます (*Fa silenzio, odi un rumore*)〉に差し替えられ、ロッシーニは1820年の新たなローマ再演(12月26日アポロ劇場)の際にアリドーロ役のジョアキノー・モンカーダ(Gioachino Moncada, ?-?)のためにレチタティーヴォ〈そう、すべて変わるでしょう (*Si, tutto cangerà*)〉とア



ドイツ圏での最初期版(ライプツヒ、ブライトコプフ&ヘルテル社、1825-26年。筆者所蔵)

リア〈深い神秘に支配される天の (*La del ciel nell'arcano profondo*)〉を作曲している(全集版 N.6a)。N.8 の合唱は最初期の再演と印刷楽譜から完全に失われ、全集版で復活させられた。クロリンダのアリア (N.15) は 1818 年のローマ再演でいったん作曲者不詳のアリアと差し替えられたものの、多くの初期再演ではアゴリーニ作曲のオリジナルが歌われていた。現代の上演や録音では通例アリドーロのアリアにロッシーニの差し替え曲(前記 N.6a)を採用し、N.8 の合唱と N.15 クロリンダのアリアはカットされるが、オリジナルの構成を尊重するならばこの 2 曲の削除は控えるべきであろう。

【上演史】

1816 年 1 月 25 日にヴァッレ劇場で行われた初演は、音楽の難しさと稽古の連続で歌手が疲れ果てていたため十分な成功ではなかった¹⁴。しかしロッシーニはフェッレティに対し、このオペラは「初演シーズンが終わるまでに聴衆の人気を博し」「2 年後にはフランスで愛され、イギリスを驚嘆させるだろう」と予言している(フェッレティ『回想録 (*Alcune pagine della mia vita*)』)¹⁵。実際はロッシーニの見込みよりもすみやかに聴衆はこの作品を理解し、初演 5 日後の 1 月 30 日付『ノティーツィエ・デル・ジョルノ』紙で「聴衆が熱狂的な拍手喝采を送った」と記されており¹⁶、その熱狂はシーズン終了まで続いたのだ(ロッシーニは 2 月 11 日にローマを去る前に、その成功を見届けることができた)。

このオペラは直ちにイタリア中に流布し、初演年にジェノヴァ、ミラーノ、トリノー、ヴィチエンツァ、ヴェネツィア、ボローニャ、ヴェローナの 7 都市で上演されて大成功を収め、翌 1818 年にはナポリ、ベルガモ、マントヴァ、ルッカ、フェッラーラ、ピザ、アンコーナ、ロヴィーゴ、トリエステ、アレツォ、フィレンツェ、パドヴァ、トレヴィーゾ、ブレージャ、モデナが加わり(1817/18 年謝肉祭期間含む)、ローマ、ナポリ、ヴェネツィアでは複数の劇場で再演されている。続く 1819 年と 1820 年にはフィレンツェ、フェルモ、チェノ、ナポリ、レージョ・エミーリア、トリエステ、イエージ、ピアチェンツァ、ミラーノ、トレント、シエナ、パルマ、ブレージャ、トレヴィーゾ、ルーゴ、ローマ、パドヴァ、クレマ、ヴェネツィア、ジェノヴァと、20 都市で上演されている。ここでもひとつの都市の複数劇場が上演したり同一年に複数シーズン上演されるケースがあり、公演数は都市の数を遙かに上回る。この段階でイタリアの主要都市を一巡し、国外では 1818 年にバルセロナ(4 月 15 日)とミュンヘン(8 月 30 日)、1820 年ロンドン(1 月 8 日キングズ劇場)、ヴィーン(8 月 29 日)、ブダペスト(10 月 30 日)、1821 年リスボン(4 月 27 日)、ヘルマンシュタットとクロンシュタット(夏)、1822 年ドレスデン、パリ(6 月 8 日イタリア劇場)、マドリッド、1823 年ストックホルム、1824 年アムステルダム(2 月 5 日)、1825 年ベルリン(10 月 20 日)、モスクワ(11 月 5 日)、フランクフルト、1826 年ブエノスアイレス(5 月 4 日)、1826 年ニューヨーク(6 月 27 日)、1827 年ヴロツワフ、1828 年メキシコ(8 月)、1829 年ペテルブルク(2 月)、リオ・デ・ジャネイロ(7 月 9 日)、ワルシャワ(8 月 29 日)と、最初の 11 年間で世界各国の主要都市に達している。なお、1830 年までの重要再演における変更については、1817-18 年のナポリ(サン・カルリーノ劇場とフォンド劇場)、1821 年までのローマ(ヴァッレ劇場とアポッロ劇場)、1822 年のパリとヴィーンに関して全集版序文で明らかにされている。

その後《ラ・チェネレントラ》は 1880 年まで毎年上演されてきたが、1894 年のローマを最後にいったん途絶え、四半世紀の中断を経て 1920 年ペーザロのペドロッティ・ホールにおいて 20 世紀の復活上演が行われた。こうして再び各地の劇場レパートリーに返り咲き、日本初演もロッシーニ没後 100 年の 1968 年、二期会が《シンデレラ》の題名で行った(訳詞上演。指揮：ニコラ・ルッチ、アンジェリーナ：荒道子)。しかし、上演に使用される楽譜がオリジナルを満身に反映していないことから、アルベルト・ゼッダの校訂で 1971 年に新版が作られた(いわゆるゼッダ版。1968 年完成とする文献は誤り)。これが批判校訂版の第一次上演譜に相当し、同年アップロードがフィレンツェの上演と録音で初めて使用した。ロッシーニ財団の批判校訂版(全集版)による最初の上演は 1997 年 10 月、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場で行われた(指揮：ジェームズ・レヴァイン、アンジェリーナ：チェチーリア・バルトリ)。



二期会による日本初演
プログラム(1968 年)

推薦ディスク

- ・ 1995 年 11 月ヒューストン・グランド・オペラ上演映像 Decca UCBD-9009 (DVD 国内盤)

ロベルト・デ・シモーネ演出、ブルーノ・カンパネッラ指揮ヒューストン交響楽団、ヒューストン・オペラ合唱団 アンジェリーナ：チェチーリア・バルトリ、ドン・ラミーロ：ラウル・ヒメネス、ダンディーニ：アレックスドロ・コルベッリ、ドン・マニーフィコ：エンツォ・ダーラ、アリドーロ・ミケーレ・ペルトウージほか

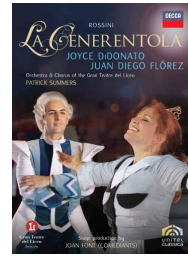


・2008年1月バルセロナ・リセウ大劇場上演映像 ユニバーサル UCBD-1099/100 (DVD 国内盤)

ファン・フォント演出、パトリック・サマーズ指揮バルセロナ・リセウ大劇場管弦楽団&、同合唱団

アンジェリーナ：ジョイス・ディドナート、ドン・ラミーロ：フアン・ディエゴ・フローレス、ダンデ

イーニ：ダビド・メネンデス、ドン・マニーフィコ：ブルーノ・デ・シモーネほか



- ¹ フィオリーニの台本は、ニコロ・イズアール (Nicolò [またはニコラ Nicolas] Isouard, 1775-1818) 作曲《サンドリヨン (Cendrillon)》(1810年2月22日パリのオペラ・コミック劇場初演)のシャルル=ギヨーム・エティエンヌ (Charles-Guillaume Etienne, 1778-1845) 台本を下敷きになっている。その原作は、シャルル・ペロー (Charles Perrault, 1628-1703) の『サンドリヨン、または小さなガラスのスリッパ (Cendrillon ou la petite pantoufle de verre)』(1697年)に遡る。
- ² 契約書全文は全集版《ラ・チェネレントラ》序文 p.XXII. 及び Gioachino Rossini, *Lettere e documenti*, vol.I., 29 febbraio 1792 - 17 marzo 1822., a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro, 1992., pp.147-150. 参照。
- ³ 全集版序文 p.XXIII. (この2通の書簡は *Lettere e documenti*, vol.I. に掲載されていない)
- ⁴ Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., pp.151-152. [書簡 IIIa.82]
- ⁵ *Lettere e documenti*, vol.I., p.191. [書簡 91]
- ⁶ ロッシーニ自身は11月8日付の手紙に題名を《宮廷のラウリーナ Laurina alla Corte》と記しており、フェツレッティの『回想録』ではロッシンがフランス語の劇『フランチェスカ・ディ・フォワ Francesca di Foix』を下敷きにこの台本を書いたとしている (全集版序文 p.XXIV.)。
- ⁷ *Lettere e documenti*, vol.IIIa., p.153. [書簡 83]。「サンドリーリャ」はフランス語「サンドリヨン」のイタリア語への置き換えであるが、一般的な名称ではない。
- ⁸ 全集版序文 p.XXVI.
- ⁹ ロッシーニの母アンナ宛の書簡、1817年1月11日付。 *Lettere e documenti*, vol.IIIa., pp.157-158. [書簡 IIIa.86]
- ¹⁰ フェツレッティ『回想録』による。
- ¹¹ 《セビーリャの理髪師》は前年同じローマ初演作品なので、特別な理由がなければそこからの改作転用は行わなかったはずである。なお〈もう逆らうのをやめろ〉とその改作の変遷については、水谷彰良『〈もう逆らうのをやめろ〉のロジーナ用ヴァージョン』(『ロッシニアーナ』第20号, pp.38-42.)を参照されたい。
- ¹² 2005年藤原歌劇団公演《ラ・チェネレントラ》プログラム、25頁。
- ¹³ *Il teatro di Rossini, Le nuove edizioni e la messinscena contemporanea*, scritti di Bruno Cagli / Franco Mariotti... Note storico-critiche di Marco Spada., Ricordi, Milano, 1992., p.80.
- ¹⁴ 『ガッレリア・テアトラレ』誌に、『最初の四晩、歌手たちは音楽の難しさと度重なる稽古により疲れており、この驚異的作品を充分表現しきれなかった』と書かれている。この記事はチェルベロ (Cerbero) の変名でフェツレッティが執筆したと推測 (全集版序文, pp.XXXI-XXXII.)。なお、初版台本には装置と美術をカミッロ・リーギ (Camillo Righi)、衣装監督をフェデリコ・マルケージ (Federico Marchesi) が担当したと書かれているが、管弦楽の指揮者やマエストロ・アル・チェンバロの名前は書かれていない。
- ¹⁵ 全集版序文, p.XXX.
- ¹⁶ 初演シーズンの新聞批評は全集版序文, p.XXXI. 参照。